

B-V-5

遷延性意識障害患者のプライマリーナーズのストレスの現状

自動車事故対策機構 千葉療護センター 看護部

○浅野清香, 赤石真由美, 二郷梨理子, 長田知子, 佐々木みどり,
小嶋昌子, 吉沢純子

【目的】千葉療護センター(以下当院と略す)では、患者の平均在院日数は844日と長く、プライマリーナーシングの看護体制で看護を実施している。一人の看護師が患者の代弁者となり、家族や医療者間の調整に関わり、患者ケアのすべてに責任をもつという役割はストレスが高いと考え、現状を調査した。【方法】4段階法によるアンケート調査。ストレスを4つに分類し、14の詳細項目を作成した。対象は、当院勤務の59名の看護師で看護師経験年数を5年以内、5～10年、10年以上、の3分類で分析した。【結果】最もストレスを感じている項目は、経験年数に関係なく、1.「プライマリーナーズとして一人の患者に責任を持って担当することの重圧感」58名(98%)、2.「遷延性意識障害患者をケアするうえでの看護師自身の知識技術不足」51名(86.4%)、3.「ケア時、家族から感じる視線」50名(84.7%)であった。また経験年数の短い看護師のほうが多くの項目に対してストレスを高く感じていた。【考察】当院の看護師は全身状態の観察から患者のかすかな動きや表情を受け止め、コミュニケーションの確立、回復をめざしている。しかし、家族の期待に添えるほどの症状改善した事例は少ない。また、慢性期の重症頭部外傷患者を理解するには豊富な知識と経験が必要であり、看護師経験の少ない看護師にとってはストレスの高さになっている。ストレスを軽減するためには、現状を受け止め、ストレスを抱え込まずに向き合い、解決策をチームで検討していくこと、積極的な自己研鑽と長期にわたり、患者と家族理解を深める努力が大切であることを今回の研究を通して認識できた。